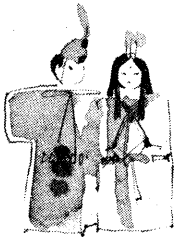
◇講演◇

幼児時代における言語の形成

外山滋比古



はじめに

今日は私が考えております言葉の問題を幼児の時期に限って話してみたいと思います。

私は教育が学校の中で行なわれるという社会の常識はそろそろ見直されなければいけないように思っておりましたが、最近幼稚園を中心とする幼児教育というものが非常に注目されてまいりました。それは結講ですけれども、どんなに幼稚園を充実整備いたしましても、家庭における言語教育、言葉に対する関心が、現在より少しでも後退するようなことがあれば、これは将来の世代に対して由々しき大事件であります。幼児における言語形成というものは、あくまで家庭の母親による言語の教育というものと協調し、調和したところにおいてのみ、力を発揮するのであるということを、はじめにおことわりしておきたいと思います。

言語教育の重要性

、それで、ごく小さい子どもにとって、言葉が、どれほど重要であるかということを端的に示す話を最初にご紹介したいと思います。

一つは、二十世紀になりましてからずっとアメリカでは、小学校就学時におきます白人の児童と黒人の児童との間に知能指数が約十七、十八～二十ぐらい、これは、大変な差でありますけれども、知能指数における平均差がありました。これは、人種差別を主張する人たちには、黒人の人種的劣等を、何よりもはっきり数字であらわすものである、というふうに悪用されて

きまして、多くのアメリカの社会の人たちも、あるいはそうであるかも知れないと考えるほどに、この知能指数の差が黒人の社会的地位に、かなり悪い影響をおよぼしてまいりました。これに対して、最近、果たして、ほんとうにそういう人種的な知的劣性というものが、黒人の中にあるだろうかということを疑った社会学者、言語心理学者があらわれまして実験がおこなわれたのです。教育において、実験という言葉は大変不穏当でありますけれども、この際は、心理学、社会学の人たちの仕事でありますから、実験という形を取ったようであります。

どういう実験かと申しますと、生まれてから小学校に入学するまでの間の、家庭における母親を中心とする親と子の関係を比較、観察した結果、一番ちがうところは、白人の家庭では、非常に早い段階から、言葉を十分に使ってしつけをしている。たとえば物をこわした子どもに対しては、なぜ物をこわしてはいけないかということを、親は子どもにくどいくらいに言ってきかせる。ところが、黒人の家庭においては、そういう場合にあまり言葉でいろんなことを言わないでお尻をぶったたく、というだけで終わってしまう。これは、言語という観点からいたしましても非常にちがいます。そこで実験をした人たちは、黒人のおかあさんたちに、白人の家庭で行なわれているようなしつけをするように指導いたしました。そして少なくとも言語的にみて、白人家庭と黒人家庭の差をなくしてみましたところ、そこで育ってきた黒人の子どもは、小学校就学時におけるかってのような知能指数の差がほとんどなくなってしまったという事実が報告され、従来の黒人劣等説というものが大きく後退するということがありました。これはおそらく、言葉だけの問題ではないと思いますけれども、言葉に代表されます幼児の教育というもののあり方を、まざまざと示してくれるものではないかと思うのであります。

もう一つは、実際私どもが頭がいいとか、頭が悪いとかいうふうに言っておりますのは、親から遺伝している部分も全くないとは言いませんけれども、きわめて多くのものが後天的なものであるということを示す事例であります。

アメリカのいわば低所得階層といわれる人たちの住んでおります俗に言えばスラム街――で、白痴に近いような母親をあらかじめ調べておきまして、こういう母親が子どもを生むということがわかりますと、その生まれた瞬間からその母親の手元を離しまして、大学の小児科と教育学の研究室みたいな所、育児チームという所へ一日に何時間かずつ通わせます。そうしてなるべく母親による教育の要素をへらしますと、三歳くらいにな

りますと大低は、普通の子どもと全く同じ能力をもち、小学校に行ってもほとんど母親の遺伝という問題がおこってこないそうであります。一方そういうことをしないで、知能がおくれている母親から生まれた子どもを自然の状態にしておきますと、やはり知能のおくれがだんだんあらわれてくる、ということが報告されております。

こういう例をみますと、私どもが頭がいい、悪い、素質があるとか、ないとかというようなことをいいますが、大体においては後天的な要素であると考えられるのであります。私たちは、そういう自分たちの努力の足らない面を人間の力でどうしようもない運命とか、先天的な能力とかいうものに責任を転嫁することによって従来教育の失敗をいわば糊塗してきたのではないかと思うのであります。

小さい時に一番決定的に大事な頭をよくする、素質を高めてくれる教育はどうも言語が中心らしいのであります。その言語ですが、今まで私どもが考えてきたような意味で言語が重要なのではなくて、われわれが人間である、まさにその人間らしさというものを育てているのが、言語であるということであります。そこで、過去の人間教育、過去の幼児の教育というものはしばらくおあずけにいたしまして、未来に向かってこれからの人間を育てる本当の意味の教育というものは、言葉に関していうとどういうことを考えていったらよろしいかということを、皆様方と一緒に考えていきたいと思うのであります。

こういう問題をなるべくおちこぼれなく考えてまいりますのに、いつ、どこで、誰が、何を、どういうふうに、なぜという六項目に分けまして考えてまいりたいと思います。

言語教育における〝いつ〟

最初に〝いつ〟の問題でありますが、言語には限りませんけれども、教育というものは先ほど申しましたように学校でやるものだという幻想が非常に強いのでありまして、学校に行くまでは、教育は始まらないというのが素朴な一般の家庭における受け取り方ではないかと思います。しかし、生まれおちたその瞬間から実は教育が、人間としての教育が始まるわけであります。時期は、早ければ早いほど、よろしいと思います。病院でお産をして、初めの一週間か二週間は、看護婦さんに預けっぱなしで足の裏に番号を書いてもらってあっちこっち運びまわされるというようなことは、大きく言えば、その子どもの一生に相当影響を及ぼすかも知れない経験になるかもしれません。

それで大きくなってからどうもうちの子どもは親のことを考

えないとか、親を捨てる子があるとか言う親がおりますけれどもはたしてほんとうに子どもを人間らしく育てたと言えるかどうかわからない親に、子どもを批判したり、子どもの愛情を疑ったりする資格はないと思うのであります。ことに生まれて間もない間は子どもにとって全く自意識というものがありませんし、将来大きくなってから、生まれた瞬間その時のことを意識している人間は全くいないのでありますから、親は割合無責任に、どうせ覚えていないんだから、わからないんだから、何をしてもいいとは思いませんけれども、いくらか心を許しているところがないとは言えないんじゃないかと思います。しかし、その実は全く物心がついていないその瞬間に全く無色で何も書いてない子どもの頭の中へ、最初にどういう一本の線をひくかということはやはり、その子どもが生きている間どうしても消されない大きな運命を決定するかも知れないのです。

文化人類学でこういうことを言っております。生まれてすぐ母親の母乳で育てる民族と、母親の母乳を与えない民族の間にはかなりはっきりした民族性のちがいがあると教えています。母乳で育った民族は大体において楽天的、調和的であります。母乳を与えないで育てる民族は主として破壊的でペッシミスティックで、悲観的である、と指摘されています。ですから物は言わなくとも、あるいは目が見えなくても、子どもにこの世に生まれてきて最初に、何を感じさせ、何を見せ、何を聞かせるかということは、大学にきて五年や十年かかってもどうにもしようのないほど大きな影響があるかもしれません。そう思えば、教育というものの順序を逆転しなければいけないんではないかと思います。

なぜ早ければ早いほどよろしいかと言うと、人間が新しいものを習得する能力は、頭の中に先入観念、先入経験、先入知識というものが少なければ少ないほど強烈に迅速に行なわれるからであります。ある一定の時期を過ぎてからですとせっかく訓練やしつけをしても全く効果をあげないという例が、これはやはり典型的な話がありますので、これをご紹介すればいいかと思います。

アヴェロンの野生児というのです。なんでもオオカミに育てられたらしい人間の子が発見されまして、年のころははっきりしませんけれどもおそらく十一～三歳くらいであろうと推定されました。もちろん人間の言葉を全然知りません。それでたいへん熱心にこの子どもの教育をしました。言葉を教えなければ人間らしくならないわけですから二年にわたって一生懸命言葉を教えたんですけれども、何とその二年間に覚えた言葉が単語

三つか四つしか覚えなかったのです。それでもなお教育を続けますと何か精神的な影響ではないかとも思われる節もあるんですけれども、とうとう亡くなってしまった。

この例のように十歳をこえるまで言葉を教えないで放っておきますと、単語三つ四つを二年かかってまだ完全に覚えられなくなってしまう。しかも結局において、生きていられないほどの打撃を受けるらしい。ところが普通の状態で育った子どもは二歳になれば言葉を発するようになります。やはり言語習得の能力というのは、頭がからっぽであればいつでもスイスイとはいっていくとは限らないのでありまして、たとえば十歳をこえたりしますと、どんなに頭の中がからっぽであっても、さきの例のように努力をしても全く効果があがらない、ということは、もはや人間になるには手遅れであるということであります。人間らしくするためには生まれたその瞬間から真剣な教育の努力が必要であります。それをおこたりますとアヴェロンの野生児のようにではなくとも、人間としてどこか欠けたところがでてくるはずです。

私どもは人間としていばっておりましたけれども、生まれた瞬間からの人間としての教育を本当に考えておらなかったという点においては十分人間的ではなかったのです。人間が類人猿と決定的にちがうのは、生まれた時からの広い意味における教育というものが言語を中心として行なわれているということにあるのです。

人間らしいところはコンピューターのような仕事をするだけの人間ではない。ただ自然のおもむくままに放浪している動物でもないところに、人間の人間たるゆえんを求めるとしますと、無意識、無自覚に行なわれている言語の教育ということになります。

そこで、幼児を仮に三つの時期に分けて考えますと、第一の時期は幼稚園にはいってくる前の年齢、ゼロ歳から幼稚園の入園時までを前期といたします。それから幼稚園の時代、この年齢層を中期といたします。小学校一、二年、低学年をかりに後期といたしますと、言語を吸収していく力は前期が圧倒的に強いようであります。といいますことは、人間は年齢と共に個性というものが固まってまいりますけれども、この陶冶性、変わる能力、新しいものを習得する能力は、個性と反比例する。個性の強い人はあまりたくさんのものを受けつけないという。ほとんど本能的な反応を示す。新しいものがはいってくるのを拒否する。そういう拒否がほとんど働かないのは生まれてから言葉を発するまでの一年か一年半、二年の間。この期間のことは

物心ついてから全く記憶になくなってしまう。どんなに記憶のいい人でも最も陶冶性の高かった、一番活発な学習をしていた時期、幼児前期には記憶が皆無に近いのです。

そこで、私どもは、教育というのは要するに個性をつくっていくものだと思いますけれども、個性ができますと、こんどは教育はできなくなってしまう。教育ができるというのは個性がないからであります。個性があると、はじめから個性があることは考えられませんけれども、何らかの意味で子どもが個性を早く持ちすぎますと、その小さな個性なりに固まってしまいます。そこで、前期、中期を通じまして、幼児の言語というものを考える場合、あまり小さな目標で教育いたしますと小さくまとまった個性ができてしまう。そうしますとあとあと教育の効果が低下するのであります。現に非常にすぐれた幼稚園、小学校、を出てきた都会の優秀な生徒が、後年になってはなはだ成長、発達が遅れるという皮肉な現象がおこっていますが、これは教育で早く個性をつけることを行なってしまったために、十分な裾野の広がりを持たないで高い山をこしらえようとするようなもので、ある一定のところで高さものびないということになっているのではないかと思います。

したがって、教育を何か一つの小さな型の中にはめるというのは、教育に名を借りた人間の破壊だと思います。教育という言葉を使いますと、いわゆる小さな目標に向かって人間をい型に押し込めるような傾向がありますけれども、そういう教育という言葉はなるべく使いたくないと思います。しかし、今適当なこれに代わる言葉がありませんので教育というのを使うほかありませんけれども、先ほど人間が生まれた瞬間から言語を中心とする教育がはじまると申しましたけれども、実は生まれた瞬間では既に遅いと言えるかも知れないのであります。なぜかと申しますと、これは昔の人が「胎教」ということを言っています。「胎教」というのは、お腹に子どもがいる時期に母親が情操的その他の面で非常に注意しなければいい子どもが生まれない、と教えていたようです。母親の部屋に、能面がかかっているといい子どもが生まれるというようなことを文字通り受け取るのは現在のわれわれではやや困難でありますけれども、しかし、母親になる人の心構えも含めて胎教だと考えますと、現在最も欠けている一つは現代的な胎教だと思い出す。胎教というのが迷信じゃなくて長い間一般に信じられておりましたのは、子どものしつけ、教育というものが生まれた時では既に遅いということを経験によって多くの人が知っていたからではないかと思われるのです。

言語教育における〝誰が〟

一、母親と協力者

ここで〝誰が〟の問題がはいってこなければならないことになります。

母親が胎教を、もし胎教に相当するものを現在において考えるとすればそれはどういうことになるでしょうか。

幼児期前期の言語の教育は、当分の間母親がやるほかはない。それから、中期、幼稚園にはいるころになりますとこれは母親と、母親以外の人、経験のある母親ですと母親が兼ねることができると思いますけれども、最近のような母親の能力が怪しくなってきた現状におきましては、協力者、ないしは援助者というものが必要であろうと思います。かりに援助者というものを皆様方のように幼稚園の先生方ということにいたしますと、中期は、母親と幼稚園の先生です。後期でもやはり、母親の役割はまだ十分意味を持っているのでありますが、少し母親の役割は後退いたしまして、小学校の先生によって肩がわりされる部分がふえてまいります。

しかし、母親による言葉の教育が全く欠けた小学校低学年の児童の生活は、考えられないと思います。前期は、いたしかたないので母親にまかせざるを得ない。次の幼児の教育では母親に協力する人がほしいのです。この母親ではダメだという場合には母親にかわる人、昔で言えば、乳母、めのとというものが、現代の社会においてどういう形にかわらなければならないのかは別として、生まれてくる命のために必要であるというふうに考えます。この問題は、今の社会や教育のいわゆる専門家と言われる人たちが十分考えてない問題でありまして、当分の間はおかあさんの自覚に待つほかはあるまいと思われますけれども、幼稚園の先生方が、もし子どもをりっぱな人間に育てようという情熱がおありならば、幼稚園にはいってくるまでに決定的についてしまういくつかの問題点というものを少しでも少なくするという努力を、やはり惜しんではならないと思います。

おかあさんに対する幼稚園の先生による協力が行なわれれば、幼稚園にはいってきた子どもに対しては、今度は家庭の母親の幼稚園への協力がうまくいくのではないでしょうか。子どもが家庭にいる間は、全く幼稚園は関知せず、幼稚園に行かせてしまえば、幼稚園にまかせっぱなしだとしたら、子どもの教育に非常な断絶ができる。家庭から突如として幼稚園にほおりこまれるとまったくの別世界が待っている。気の弱い子どもはその衝撃で変になるでしょう。少し子どもを乱暴に扱い過ぎると思

います。

将来幼稚園へ預かるということがわかっている子どもなのですから、地域社会における母親に対しての幼稚園の育児に関する啓蒙あるいは、協力を行なうのです。そして子どもが幼稚園にはいったら、母親の協力を得られるようにするのです。母親の手を離れると、いっぺんに社会的な集団の中へ投げ入れられますが、その衝撃は、一種の乱暴な離乳のようなものです。その衝撃が、あとあとまずい結果をひきおこすようなことは問題です。たとえば、学校恐怖症というのも、幼稚園の入園時における衝撃が関係しているかもしれないと思われます。ですから家庭と幼稚園との一貫性というものは、ただお題目としてでなくて実際問題として大切であることについてもっともっと認識を高める必要があろうかと思います。

二、日本の母親の愛情

母親は前期の教育のいわば主任であるわけでありますけれども、それがどうもいろいろ問題があります。母親の愛情表現の仕方には、民族によって違いがあるように考えられます。従来日本の母親は、愛情こまやかな点においては、世界に冠たるものがあったのではないかと思います。日本人が、優秀民族であるとすれば、育児というものが非常に献身的な母親の愛情のもとに行なわれていたこととときってもきれない関係にあるのではないかと思います。ところが、最近は日本の社会全般が西欧化してまいりまして、そういう愛情表現というものは、むしろ否定されるべきものだという考え方が、若い女性、教育を受けた女性の間に広まってまいりまして、母性愛にブレーキをかけるような傾向がみられるように思います。今までの母親は教師としてほとんどゼロに近いと思いますけれども、このゼロの教師がなおかつ実際にはすぐれた育児ができたのは、まさに母性愛のこまやかさに救われていたと考えられます。もし、従来と同じように、教師としての能力がおそまつでありながら、愛情だけ減るようなことがもしあれば、これは確実に子どもの能力を減らしてしまうことになります。

生まれた瞬間からおかあさんが何という言葉を発するか、ということをおかあさんが記録をしているということは、皆無でありましょう。小さいときからの写真をとって記録するのは珍しくなくなりましたけれども、人間の言葉として最初に言った言葉が何であったかということは、おかあさんは自覚していない。これでは、言葉の教育者してまず失格でありましょう。

赤ちゃんの寝ている部屋にテレビがつけ放しにしてあって、おかあさんがどこにいるかわからないという場合、子どもは、

この世界ではあれが言葉だという錯覚をもつかもしれません。育児がある程度すすむまではテレビを消さなければならないと思います。それは消すか消さないかの問題ではなくて、母親が自分は言語教育の主任教授であるという自覚がない段階において、テレビからの人間の声らしきものを聞かせるのは、はなはだ軽率であり不注意であり危険であるといわざるを得ません。ネコのなき声、犬のほえ声というものは、子どもにとってあまり言語教育の妨げになりませんけれども、テレビの言葉は、生まれたばかりの赤ん坊に聞かせるためのものではなくて、大人を対象にしてしゃべってるのでありますから、そういう言葉を聞いて赤ん坊が育てば、とんでもないことになる可能性は十分あるわけであります。

しかし教育ママだといわれるお宅に行ってみますと、まだ言葉のはっきりしない子どもがいるのにテレビをつけて、おかあさんはテレビに夢中になっている。それなのに子どもが幼稚園にはいるときになると急に幼稚園選びに目の色をかえる。それまでやってきたことと、幼稚園を選ぶときのあわてかたとどこで結びつくか、はなはだ不思議であります。ほんとうに子どもの生活をみつめてきたおかあさんなら、どういう基準で選ぶかは別として、幼稚園を選ぶことは当然あっていいことだと思います。しかし、数年もテレビの騒音の中に子どもを放ったらかして平気だったおかあさんが、幼稚園に大さわぎするのは明らかにおかしいのです。

三、現代女子大生気質

そういう母親の意向が何か教育における受け手の優位というようなことで、先生方の自由な活動をこう束するようなことがあれば、子どもにとって不幸はいっそう深くなると言っても過言ではないでしょう。女子大生の多くが女子大であることを恥じております。男子学生がいないのをもの足らないと思っています。これは考え違いだと説いているんですけれどもあまりき目がありません。これは、現在のまちがった傾向を端的に彼女たちがあらわしてるのであって、彼女たちだけを責めることはできません。女性にとって何をすれば一番人間らしい、価値のあることができるかと申しますと、自分の子どもをその能力を十分生かしきれるような人間に育てることだと言っているのです。一人だけでも、二人でも、三人でも育てれば、それで確実に人類に対する責任は果たされるのであります。

そういう考え方は持たないで、満員電車にぶらさがって、会社へのつとめに出れば、社会に出られ、それが生きがいだという。家庭にはいってしまうのは、生きがいのないことだときめ

て、すこしでも男のようにしてみなくっちゃというのが、女性の理想のようであります。今までは、男は偉いんだというような考え方が通用していました。男の人と同じようにすることが、女性としての向上につながるという非常に遅れた考え方に立っているのです。大学は男がいる、そこへも女がはいっていくのがいい。女だけの大学なんていただけないという。

四、無意識の教育——そのむずかしさ

従来のおかあさんの方が、無意識ながら非常にむずかしいことをやっていたと思います。無意識にできることは、やさしいと思うのは大まちがいで、現におかあさんたちが、愛情に導かれてやっていらっしゃる生まれたばかりの子の教育というのは、案外幼児教育の専門家よりも、はるかに高い無意識な活動であるということは言えるのであります。

しかし、無意識というものは、もしまちがった場合は、これは、チェックすることができない欠点があります。意識的ですと、ほとんど無意識では完全に行なわれていることが、かえってなかなかうまくいかないということはあります。しかし、意識的な場合だと訂正がきくのです。たいていの母親は生まれたばかりの子どもを育てますのに、愛情によって育てるわけですけれども、愛情というものは母親であれば、だれでも最初から存在すると言えるかどうかについて疑いがあります。愛情というのも、やはり訓練によって育てていくべきものではないでしょうか。人間としての愛情はやはり、育てて成長させていくものだと思います。親としての愛情は母親が一生懸命に育てていくものだ、という考えもないような母親が、子どもを育てましても、当然無意識的教育はうまくいかないでしょう。

昔の人は、このうまくいかなかった例を総領の甚六とか言いました。母親が未熟で愛情が不完全。したがって子どもが知的な栄養物として受け取る言葉についての用意不十分。こういう状態で育てられる子どもは、最初に申しあげましたアメリカにおける例などを参考にいたしましても、知能の遅れがあっても不思議ではないのであります。昔の人が甚六と言っていたのは、やはり当たっていたのであります。昔の人は、たくさん子どもがおりましたから、ひとりは失敗しても二人目からうまく行けば育児は成功だったとしてよいのです。しかし、最近のように、子どもが一人か二人で、もし失敗しますと、たいへん高率の失敗になります。ですから、昔のように一人を育ててみてうまく行かなかったから、今度はこれにしましょうといって、だんだんうまくなって行くというふうなのんきなことは、現在では許されないのです。そのために、新しい胎教をおこして、最初の

子どもから確実に成功してもらわないと困ると思います。

五、幼稚園としてはどうしたらいいか

もし万一母親が、初期の教育に失敗して幼稚園に入ってきた子どもを、幼稚園ではどういうふうに扱えばよろしいのか。母親のやり得なかったことをやりなおすのは、全く不可能ですから、これはできない。しかし、もし何らかの形でおかあさんにまだできることが残っているならば、幼稚園とは別に、おかあさんは家庭でこういうことをして下さい、といっておかあさんに一種の処方せんを渡す必要があろうかと思われます。

それには、幼稚園の先生がこういう問題に関してかなりはっきりした意見をお持ちでないとできないと思います。幼稚園の実際の教育にあたってらっしゃる大部分の先生は、結婚前の若若しい女性であります。こういう方のお姉さんとしての役割と効果は、大変大きいものだと思いますけれども、幼稚園がごく若い方だけで運営されてはすこし困る。皆さんを前にして失礼なと言われるかも知れませんが、幼稚園はぜひ生涯教育でやっていただきたいと思います。先生方が一時は幼稚園をおはなれになることがあっても、必ずまた幼稚園に帰ってきていただきたい。ご自分のお子さんをお育てになった経験をもとにして、もう一回幼稚園で今度は母親も含めて教育をしていただきたい。幼稚園の先生の平均年齢が、三十歳の真中ぐらいということになるとよいと思うのです。幼稚園の先生は決して若いときの一時の職業とお考えにならないように願いたいと思います。今いろいろご経験なさることはこれから皆さんが自分のお子さんをお育てになられるとき、非常に参考になるだろうと思います。ご自身のお子さんをお育てになった経験というものが、次の幼稚園の教育には大変なプラスになるようにしていただく。そういう点で私は、幼稚園の教育は、先生にとっても生涯の教育であっていただきたいと思うのです。

そして、幼稚園の先生方に母親の代理として母親がし残した仕事をなるべく早く有効に行なっていただきたい。それは、どういうことかと言いますと、言葉というものに対する考え方を改めていただきたい。言葉に対する考え方は教育を受ければ受けるほどせまくなる。そういう小さな言葉ではだめなんです。おかあさんが子どもに与えなければならない言葉は、ちょうど母乳のようなもので、一見何の変哲もありませんけれども、総合栄養を含んだものです。母乳的な言葉というものは母親の言葉、母なる言葉であります。英語で母国語のことをマザー・タング(mother tongue)と申しますけれども、これは母の舌ということです。私どもが一生の間使います母国語は、比喩ではな

くて、ほんとうに母なる言葉で大地のようなすべてのものを成長させる言葉が、マザー・タングのほんとうの意味ではないかとこのごろ考えるのであります。

このマザー・タングに当たるものが、もし幼稚園に入ってきた子どもに欠けているとすれば、これが将来大きくその子どもの成長にひびくことは明らかであります。なるべく早くそれを補充することであります。それはただ字が読めるとか、書けるとかいう他愛のない末梢的なことではなくて、言葉のエッセンスみたいなものを受け継いで持ってるかどうかということを見きわめていただくことです。幼稚園に入った子どものそういうことを注意して下されば、子どもたちはその幼稚園の先生を一生の師と仰ぐであろうと思います。

私のまわりに現にそういう友だちがいまして、その友人を大変うらやましいと思います。その人は幼稚園の時の先生が亡くなられたときに文集を作ったりして、非常に献身的な働きをしました。その人は何か問題が起きると、あの先生ならどう言われるかなということをいつも考えたそうです。ほんとの先生がその人には幸いにも幼稚園にいらっしゃったということであるわけです。どうせ学校に行く前のことなんだと軽い気持ちをもたれずに、幼いときの教育がどこまで達するかその行きつく先がどこであるかを見きわめるおつもりになっていただきたい。大学に入ってきますともうかなり陶冶性が失われて処置なしでありますが、幼稚園あたりですと、あつい鉄みたいなものでまだどうにでも曲がる。そういう点で最も教育の可能性が高い時期にすぐれた教育をすることができれば、それからさきの教育をやめてしまってもかまわないではないかということすら考えるのであります。

言語教育における〝何を〟

一、はじめに――全人間的教育――

それで次は、〝何を〟ということでありますが、これは簡単に申しますと、年齢が低ければ低いほど、生活の全域、見るもの聞くもの全部教育でありますから、何か教育というわく組みをこしらえて、教育者だけが教育を行なうのだという考え方をまず大人の方で取り去る必要があると思います。ことに、幼児前期の母親の教育というものは全く無意識で行なわれておりますけれども、無意識に行なわれるということは生活の全域を含むという点ではこの条件を満たしているようであります。子どもは空気を吸うように、そういう教育的要素、たとえば言葉を中心とするものを吸って、そして育っていくのであります。し

かし、やはり教育は家庭の外に出してみる必要があります。日常性をあえて捨てることが言語教育にとっても、人間教育にとっても大事なことでありまして、幼稚園教育がこの非日常性の中で行なわれなくてはならない部分が少しあります。一人だけではどうしても生きていくことのできない社会的要素というものは、この家庭における日常からいかに離脱できるかというところにあると言ってもよいのです。この家族離脱を乱暴にやりますと、先ほど言いましたように、不用意な離乳のような衝撃を子どもに与えますから十分注意が必要でありますけれども、日常性を非日常性に移行させていくことは大変重要なことだと思います。家庭におけるしつけと、幼稚園、学校での教育との関係は、ちょうど車の両輪のようなものであって両方なければダメなのです。もし学校の先生が重視されるあまり家庭にまで非日常性をもちこむようですと、いわゆる優等生ができてまいります。非日常性すなわち試験、テストなどには非常にいい成績をとって頭のいい子どもであるような感じを与えますけれども、人間としての広がりと言いますか、活力と言いますか、力の欠けた子どもになります。大体若いうちは、そういう非日常性の人工培養的な人間の方が早く進歩しますので学校の成績もよろしいし、いわゆる優等生になります。しかし、もう少し広い目で見てみますと、どこか人間として魅力が欠けているのです。

私たちは昨年、旧制中学校卒業三十周年同窓会をいたしました。昔の友だちと夜おそくまで話したんですけれども、話してみてああここにも人生があるんだなというしみじみした余韻を残した友人は、考えてみるとみんな中学校でやめてしまった友だちであります。なぜ上の学校へ行った人間がつまらなくなるのか。ほんとうに、教育の欠陥というか、恐ろしさを感じました。学校教育では、ある程度非日常性の中の知識というものですぐれた能力を示す必要があるわけですけれども、そういうものでのみ、人間がほんとうにすぐれた人間なんて考えることが、非常にまちがいであると思うのであります。なぜ学校の試験がよくできると人間としても価値があるのか、そういう点をもう一度素朴に問い直してみる必要があるように思います。

もし、人間の価値を大学卒業時において判定すれば、今のような傾向もあるいは肯定されるかも知れません。けれども、その死ぬ瞬間まで歩みをやめない、成長することをやめないのが人間だと考えますならば、小さな意味における優等生や秀才をつくることが、きわめて残念な教育ということにならざるを得ないのです。やはり小学校以前の教育におきましては、なるべ

くそういう非日常性に片よったような生活の中へ子どもを追いやらないようにしたいと思います。もちろん私も非日常性が必要だということは認めますけれども、その比重には、かぎりがあるべきだと思います。たとえば犬が針金でしばられていたらかわいそうだという気持ちを持つ子ども、春になって青葉が出れば、すばらしく美しいものだという感じを失なわないような子どもでなくてはいけません。日常性を欠如した生活の上に非日常性の教育が頭でっかちにのかっかっているならば、教育のほんとうの力というものを発揮することはできないように思います。

二、言語における母乳教育から離乳教育

いよいよ、言葉の問題の〝何を〟に入るわけですが、母親が母乳を与えるときの母乳にあたるのが前期の子どもにおける教育の言葉ではないかと思います。母乳は、小さな子どもが成長していくためのものすべてを含んでおりますが、母なる言葉、先ほどのマザー・タングはすべての可能性を秘めた原動力であると思います。

ただ母親だけでやります教育は、ある時期になりますと、子どもの精神に少しブレーキをかけるようなところがでてまいります。それでおそらく、七、八歳から十歳くらいになるとおかあさんの言うことを聞かなくなって、反抗期がでてくるのだと思います。これは母親が、母なる言葉の力にもたれかかり過ぎまして、離乳を適当な時期にしないためにおこるのだと思います。

そこで、皆さんにお願いしなければならないのは、母親がうっかりして母なる言葉からの離乳をしないでいたら離乳を行なってやることです。それでは、その場合にどういう言葉を教えれば母なる言葉からの離乳が行なわれるかということになると思います。

私は、語学の教師をいたしておりまして中学校の生徒以上の年齢の子どもに外国語を教えるというのは大変むずかしいことを痛感します。あまりむずかしいものですから、途方にくれた語学の教師は外国人の語学の専門家に意見を聞くのです。どうしたら最も少ない時間で、効果が上がるだろうかと意見を求めたりします。それに対して、赤ん坊が言葉を覚えるように教えたらよかろうなどと言うのです。それが、自然学習法と言いまして、現に最も有力な方法として行なわれているのですが、実はとんでもないことであります。中学生を赤ん坊のように教えたらそれこそ中学生は反発をしてしまう。十二、三歳に達した子どもが赤ん坊のようになることは不可能です。十二、三歳の

子どもには十二、三歳の子らしい勉強をするのが自然学習法のはずであります。それはとにかく知識として、母国語でないものを教える教育、言語教育の理想の方法は、現在ありません。それで子どものうちにやれば一番いいという人がでてきます。外国語をあまり小さな子どもにやらせますととんでもないことになります。皆さん方で外国語、英語の早教育に関しまして積極的な意見を持ってらっしゃる向きは、十分お考えいただきたいと思うのです。

母なる言葉から離乳をいたしますときに、どういう言葉で離乳をすれば一番いいかと申しますと、おとぎ話みたいなものがよいのです。おとぎ話は日常性を持っていない。超現実世界をえがいたものです。それから童話を聞かせるのもよろしい。これが母親が人手を借りないで言語的離乳をさせてきた一つの方法であります。どこの国の家庭でも、おとぎ話をきかせ、子守歌、童話をきかせるのが欠くべからざることになっていますが、これによって子どもの言語が母親の言葉から離れるきっかけをつかむことができるからです。ところが現在ではおとぎ話のできる母親がきわめて少ないのであります。それで世界の童話全集というのをもってきて〝お勉強〟をする。しかし、離乳期においては、そういう文字になったおとぎ話では十分な効果を上げないのであります。

やはりおかあさんが何回も何回もくり返して何回も聞いたもので、そらで言えるようなものでなければいけないのです。そういう話を今の若いおかあさん方がどれくらいもってらっしゃるでしょうか。五十年前のおかあさんに比べて非常に少なくなってきていると思います。言語的離乳にそれだけ不便になっているということであります。幼稚園の先生はそういったおかあさんのいろんな欠陥を補ってあげる必要があるかと思いますから、おとぎ話、童話というものに対しては、これまで以上に関心を持っていただきたいものであります。

三、子どもにきかせる話

その場合に、童話、おとぎ話はどういうものがよいかということになります。具体的に述べますと複雑でありますけれども一つ言えますことは、片よってはいけないということです。ある先生が、ひとりの童話作家に興味を持ち、その作品のファンになりますと、それだけを子どもに教えてしまいやすい。人情としてやむ得ないことですけれども、これは子どもにとってはゆがんだ離乳言語を受け取ることになります。昔のおとぎ話は作者がはっきりしていない。誰がいつ、どういうふうにして作ったか、わかっていないのです。そういういわば古典的なおと

ぎ話がやはり一番よろしい。現代において、児童作家のさまざまのすぐれた作品が出ておりますが、ひとつこまるのは、作者が原稿用紙に向かって書いていることです。そういう言葉を印刷にして、それを読んで子どもに聞かせても、ほんとうの意味での言語の教育にはならないのだと思います。

児童作家は創作に当たっては、口で何回も言ってみるのです。芭蕉は自分の俳句を完成させるまでに、舌頭で千転させよ、何回も何回も何回もくり返しくり返し言ってみて、これ以上どうにもしようのないという形まで推敲することを俳句の作法としてのべておりますけれども、それに習う要があります。母乳語を離れたばかりのような子どもに与えます言語、離乳食の言語としては、完全にわれわれの口と耳の中でこなれた言葉を与える必要があります。現在の児童文学にはあまりにも小さな芸術的意図がみえすいております。そういう作品はもう少し年齢が高くなったところにおいては効果があると思いますけれども、幼稚園の段階においては、すこし人工的ではないかと思うのであります。

もう一つつけ加えますと、幼児の中期における言葉の教育で何を教えたらよいかということは、はっきりしておりませんけれども、なるべく長い歴史を経てきた自分の国のおとぎ話を中心にしていただきたいと思います。そして、それによってできるものが、俗に『三つ子の魂』と言われるものであります。逆に三つ子の魂をしっかり作り上げるものは何であるかというのを考えますと、日本語にどっしり根をおろして五十年、百年ではビクともしない言語でなければ、なくてはならないことがはっきりしてくるでしょう。そうでないと、せっかくの学習能力の非常に高い時代に、非常にゆがんだ三つ子の魂を作ってしまう結果のように思います。

この点に関しては、現在の幼稚園をとりまいている状況は、必ずしも理想に近いとは言えないと思います。末梢的なことに目をうばわれないで、魂に単刀直入にはいっていくような言葉は何かを求めますと、きのう作られたような作品ではダメなんです。去年できたベストセラーではダメです。十年前のものでもなお新しすぎる。やはり何十年、百何十年、何百年代と伝わってきた言葉の中でつちかわれている物語のうち、これだと思われるものを二つか三つを選んでそれだけを教えるにしても、三つ子の魂は現在よりはよほどしっかりしたものになるよう思われます。

言語教育における〝なぜ〟

何をという問題はこれくらいにとどめておきまして、それでは〝なぜ〟言語がそんなに大事なのかという点にはいります。

なぜ人間は言語を教えるのか。私どもは、赤ん坊が言葉を覚えることを当然のことのように思っております。それがすばらしいものであるということを考えたこともないくらいであります。けれども、人間が生まれてから数年の間に言葉が自分でしゃべれるようになるというのは現在の最先端の学問においても見当もつかないくらいむずかしい問題です。

一、生成文法

私どもは一生自分の頭の中に日本語文法を持っておりますけれども、その日本文法がどういうものであるか自覚したことがないのです。「ある」という動詞の活用ができますか、と聞かれたときに、英語のbe動詞なら知っているけれど「ある」の活用はどうもということになる。ところが「ある」という言葉をちゃんと活用させて日常生活でまちがったことを言わないでいるのです。文法は私たちの頭の中に無意識、無自覚に、しかも完全な形であって実用になっています。英語の文法でbe動詞はちゃんと知ってますけれども、英語で会話はできないかもしれません。どういう文法をもっているのかわからないのに今まで一度も聞いたことのないような文章をつくることもできます。

そういう能力をアメリカの言語学者チョムスキーという人は生成文法と呼んでいます。この生成文法はむずかしい言葉でありますけれども、要するに文法における三つ子の魂なのです。三つ子の魂なんてことはアメリカの人は言えませんからジェネラティヴ　グラマー(Generative Grammar)と言ってるのですけれども、要するに文法の三つ子の魂です。それをごく小さいときにつくってしまう。そして、一生涯これが役にたっているのです。そういうことがどうしておこるのでありましょうか。これがわかれば、人間が類人猿と違う根本的なところがはっきりするんですけれども、それはよくわかっていないのです。

二、言語哲学

しかし二十世紀になりまして、世界的傾向として最も興味のある分野は言語であるということに期せずして多くの人たちの意見が一致してきたのであります。現在の哲学は、言語哲学といわれるものであります。どうして言語が今のように人間にとってのみ存在しうるのか、――一体どこまでが言語というもので人間は説明がつくのか、そもそも言語とは何かというようなさまざまな言語についての疑問がでてまいりました。それで社会学も心理学も哲学も言語学も大きく変わろうとしています。実際の教育とは無関係であるというのはせまい考え方です。

この世界的な言語に対する関心を目立たせた一方の中心であると見なされるウイットゲンスタインという哲学者が新しい言語哲学をこしらえたきっかけは、故国へ帰って小学校の先生をいたしましたときに、児童の言葉を観察している間に、ここで分析哲学の着想を得たというのです。今日のヨーロッパの言語哲学は、ウイットゲンスタインがとらえた言語、この不思議なるものという考えをめぐって動いていると言っても過言ではないでしょう。

ウイットゲンスタインは小学校の児童しか観察できなかった。これからは言語の問題はもっと前の段階、幼稚園における言語、児童の言語というものを考えることによって、さらには、その前の前期における母親の教えている母乳としての言語という問題をとりあげることによっておそらく前人未踏の新しい分野を切り開くことが可能です。こんなに忙しいのに哲学なんてとんでもないとおっしゃる方は、哲学というものの本質を誤解してらっしゃるのです。なぜという気持ちを持って子どもに接せられるならば、そのときその人はりっぱな哲学者であります。幼稚園の先生方が大変忙しいことは、局外者にも十分想像できることであります。しかし、園児が帰ったあとほんのわずかな時間でも、言語についてなぜだろう、という気持ちを持たれれば、そのときにおそらく現在の最先端の学問が解決していないような新しい分野に目が向いていると言っていいと思います。

研究室で机に向かって厚い本を読むことが研究であり、学問であるというような考え方は過去の学問の姿であります。休息の、ほんのわずかの時間にでも、頭の中をかすめるような疑問を疑問として素直に追求していれば、新しい学問がそういう人の手によってできるのであります。ですから、私は教育の実践活動に従事している方がもう少し真の意味において哲学的であることが非常に望ましいことではないかと思います。なぜという気持ちを大事にしていかれれば、幼児教育というほとんど地図のない国で皆様方の歩かれたあとが道になるでしょう。皆さんの前に道はないかも知れない。しかし、自分の歩かれたあとが道になる。そういう道を皆さん方はみつけられるのです。考えてみれば非常に幸福な職業であるわけです。このなぜという気持ちを大いに持っていただきたいと思うのであります。

言語教育における〝いかにして〟

一、ウエットな愛情、ドライな愛情

最後に第六番目、いかにして。

これが実践論であります。皆さんのように幼稚園で日々実践

活動をしていらっしゃる方々に対して、私のようなまるで素人が飛びだしてまいって余計なことを言うのは、釈迦に説法ということであります。申しあげなくともいいかと思いますが、局外者として一つ言わせていただきます。母親の愛情が大事だということは再三申しあげてきましたけれど、幼稚園の先生方ならば、当然おかあさんのかわりをつとめられるということを非常に期待する反面、おかあさんの持ってるような愛情を幼稚園の先生に期待するのは、やはりまちがっていると思います。母親の愛情をぬれた愛情ウエットな愛情だとしますと、幼稚園の先生方の愛情はもう少し乾いた愛情というものであってほしい。そのウエットな愛情とドライな愛情とが、うまく裏表をなして協調したときに子どもの言語的離乳というのは、ある程度の刺激、衝撃を伴いながらも、その子どもにとって発展的創造性をもって行なわれることになるだろうと思います。

ところがこのごろ幼稚園通いのおかあさんと子どもさんを見ていますと、おかあさんがひどく教育的になりまして、あのときどうしてバツつけなかったの、ダメネ、何子さんはああしたのにあなたどうしてしなかったの、などとやっています。こうドライな愛情に変わってきています。おかあさん方が幼稚園の教育というものに協力してるんだと思っているのだったら、誤解もはなはだしいと思います。

一種の分業ということが必要になります。分業が行なわれるにはやはりおかあさん方の教育が何らかの形で行なわれなきゃいけないのです。子どもたちの母乳の言葉の教育は母親がしなくてはならないのです。学校で女性に母親としての言葉の教育はゼロであります。そういうことを、もしやろうとすれば社会から大変な反撃を受けるでありましょう。しかし、社会でもおかあさんの言葉を高めるような教育が行なわれているかというとやはりゼロであります。婦人雑誌なんかをみると衛生、栄養に関する育て方はとりあげられていますけれども、人間を正しく教育する、一番の根幹に対する指導はきわめて少ないように思います。ですから、幼稚園では、子どもだけでは教育は完成しないのです。やはり母親をまきこんでの教育になります。しかし先ほどのように妙な教育ママにするのではなくて、母親のしっかりした地位、立場を失なわない上での教育というものがなければ、どんなに先生方が幼稚園で努力されても十分な効果があがらないと思います。

その場合、乾いた愛情というのは何かきびしい愛情で、ウエットな愛情はやさしい愛情という誤解をお持ちになる方があるかも知れませんけれども、そうではないのであります。乾いた

愛情というのがほんとうに効果をあげるのは、子どもを適切なときに〝ほめる〟ことに尽きるようであります。おかあさん方のウエットな愛情は、とかく小言幸兵衛みたいになって、絶えず子どもに小言を言っている。言葉数が多くなりますと、言葉のインフレーションをおこしまして〝ダメですよ〟と一こと言った方が百回言ったときよりもよく効くのです。しかし、おかあさんは何回も言わなければ気がすまないらしくて朝から晩まで同じことをくり返している。そうすると子どもはそれに対して一種の防ぎょ体制をつくります。馬耳東風的な受けとり方をします。おかあさんはこれでもまだダメかと思ってさらにうるさく言います。子どもはますます馬耳東風になる。これでとんでもないことになってしまいます。

子どもに心をふるい立たせるのは、ことに乾いた愛情で成果をあげるには、子どもをほめることです。一人の子どもを母親が教えるのとは違ってたくさんの子どもを一人の先生が教えるというような状況においては、理くつを言う前に、どの時点でどの子をどういうふうにほめるかということについての方法論を持っているか、いないかが分れ目だと思います。持っていれば、乾いた愛情で、おかあさんがし得なかったことまで十分に導いていくことができると確信するものであります。

このほめるということは、案外むずかしいことであります。外国の言葉をみましても「あらさがし」に相当する言葉はたくさんありますが〝長所さがし〟という言葉はないのです。これまでの人間の考え方が人間の欠点を改めるという方に向かうあまり、人間をのばすということをなおざりにしていたことのあらわれではないかと思うのです。これからの教育はほめることを考えなくてはなりません。ただやたらにほめても効果はないのですから、ほめるタイミングを失なわず、しかるべき時に誰がみても肯定するようなほめ方をしませんと、集団教育の中で、一種のえこひいきのようなものがはいりこむ余地もあります。

ですから、きびしい乾いた愛情がないと、ほめるということは効果を発揮いたしません。しかし、いろんな条件をふまえた上ですと教育はほめるということに尽きるのです。人間の学習能力がたいへん高い幼児期において、今まであまりほめるということをしないで教育をすすめてきたというのは大きな失敗だったと思うのです。それが教育は何となくいやなものだという感じにつながる一つの理由ではないかと思います。皆さんにはひとつぜひうまくほめるということを見いだしていただきたい。それが地図のない処女地のような幼児の教育における唯一の確実な磁石であります。それに導かれて進まれるならば、おおよ

その方向をまちがうことはなかろうと思うのです。

おわりに

これで、大体〝いつ〟〝誰が〟〝どこで〟〝何を〟〝どういうふうに〟というようなことを申してきましたけれども、最後にもうひとことだけ申し上げます。皆さん自体が、子どもだけにかまけてご自身の進歩を忘れられるようなことがあれば、これは教育としてやはり由々しいものになろうと思います。先生が子どもと同じように進歩するというのは残念ながら不可能ですが、とにかく一歩でも半歩でも毎日前に進んでいるということが、子どもの育っている魂をより大きく育てるのだという仕事の自信につながるだろうと思います。

過去の教育は完成した人間としての教師による教育を考えていたのではないかと思います。私どもは、永久に未完成、不完全な人間であります。しかしこの不完全なものをより少しでも完全なものにしていくというエネルギーを頼りにして、そういうものがあれば子どもたちの成長も助けることができるのです。教育の前提となるものは、教師自身がいかに自らを育てるかということに帰着するように思います。

ほんとに教育の効果をあげるというのはどういうことかと言いますと、〝年をとらない〟〝美しくなる〟にあると思います。この二つに成功すれば、女性の方はことに具体的な形で自分は進歩しているんだという自信がわいてくるだろうと思います。誰しも美しくなりたいとお化粧をしますけれども、それははかない道化の技であります。そういうお化粧によってではなく、心のもちかたでいよいよ若やいで、いよいよ美しくなられるには、先生方が日々これ好日、日々これ若く、日々これうるわしくある必要があります。

そんなことはできないだろうとおっしゃる方は、教育というものにまだ十分目を開かれてないからであります。

二十代の人間の顔というのは親の責任だと言っていい。三十歳ぐらいでも親の影響を脱することはできません。それで三十までは外見上も年を取るのは、やむを得ないでしょう。しかし、三十になったらそろそろ逆に年を取ることが可能だと考えてよろしいのです。ヨーロッパに四十になったら自分の顔に責任をもてという言葉があります。四十の顔はもはや親の責任ではないということです。四十年間のその人の人間としての総決算がわれわれの顔に出る。いつもわれわれはその決算書をぶら下げて歩いているのです。（笑）

若く美しくあるためには、どんなことでも、どんなけしからんことでも、何も考えないよりは、考えた方がよいということ

は言えます。家庭にはいって十年間たった人とバーのホステスとして働いていた人と比べてみますと、少なくとも女性としては、バーのホステスの方が若いでしょう。考えていることや生活様式価値とか、そういうことは無関係に、新しい刺激というものに絶えず身をさらしていることが人間を老化させないで美しくするのでしょう。場合によっては逆に若くすることもありうると思います。

それでは具体的にどうしたらいいかということになるわけですが、ひとつ手をお教えします。三十歳ぐらいになってから、一つ外国語をお始めになることです。皆さんはやっぱり外国語の教師だから我田引水をするとお考えになるかもしれません。しかし、皆さんが、中学校や高等学校でお嫌いになられたかもしれない英語などをやっていただきたいと思ってるんではなくて、エスキモー語でもホッテントットの言葉でも純粋に言葉として勉強してごらんになると、しわがのびるでしょうと申し上げたいのです。そして美しい顔に除々に近づいていくことができるでしょう。そういうことをなし得た先生から教わる幼稚園の園児は、最大の幸福を与えられることになると思います。

三つ子の魂は、残念ながら母親の手によってつくる他はないと思いますけれども、かりに五歳児の魂というものがあって将来大きな影響をもつものだということがわかるようになれば、いま申しましたような、永遠に若く、うるわしい、しかし、経験はきわめて豊かな幼稚園の先生によって築かれるものであることは、ほとんど確実だと思います。そういう意味で、教育の最も基本的な、人間性を形成するような仕事が、皆さん方の前に横たわっているのであります。それを考えて興奮しないというのは人間としておかしいくらいであります。私は、自分のことではないのにその可能性を考えると興奮を禁じ得ないものであります。そのすばらしい可能性を日常目の前にしていらっしゃる先生方が誇りを失なわないで幼児の教育に当られるならば、人類のために大きな貢献をされることになるのを疑いません。

素人がいろいろ申しましたが、長時間熱心にお聞き下さったことを感謝して終りにしたいと思います。ありがとうございました。

（お茶の水女子大学）